
お嬢様の憂鬱 上

瑠紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様の憂鬱 上

【Nコード】

N0657D

【作者名】

瑠紀

【あらすじ】

僕は彼女に恋愛感情を一切抱いていなかった。私は彼に好きと思つたことなんて一度もなかった。はずなのに・・・お嬢様とお坊ちゃまの我が儘コメディー。「結婚しなさい。しないと・・・」僕はあなたのことが嫌いなんです！・・・今、最強のコンビが来る！！

アンケート（主人公、サブ主人公紹介）（前書き）

作者が受験生のため、更新が遅れます。
ご了承ください。by 瑠璃

アンケート（主人公、サブ主人公紹介）

瑠斗「ちわゝ　今回は璃紗さんとレストランに来ました」

璃紗「何してるの？　というか、誰に向かっていつているのよ」

瑠斗「そりゃパソコン画面の向こうの・・・って誰？」

璃紗「知らないわよ。頭大丈夫？　それよりテーブルの前になにかあるけど・・・」

瑠斗「・・・？　あ、ほんとだ。何コレドキドキアン」

バシユッ

瑠斗「読もうと思ったのに、何するんですか！！　むー。」

璃紗「なに？　これ。アンケート？」

瑠斗「む・・・人の話流したな。まあいいや。アンケート？　ああ、そうみたいですネ。やります？」

璃紗「目の前にあるのにやらない訳ないじゃない。山が目の前にあったら上るのと同じ原理よ。」

瑠斗「学校の課題なんかはやらなくせに・・・それにぜーったい景品ねらいだろ・・・」

璃紗「何か言いましたか？」

瑠斗「「こわー!!」「何も言ってますんぐー!!」」

璃紗「じゃあ、やりましょう」

あなたの名前は？

璃紗「私の名前も知らないの？」

天乃宮^{あまのみや}璃紗^{りさ}、天乃宮財閥の次女です」

あなたの年齢は？

璃紗「歳??16歳よ?」

瑠斗「かくさないんですね」

璃紗「隠すほどの歳じゃないもの」

あなたの血液型は？

璃紗「AB型」

瑠斗「どうりで、変わってる性格なんですネ」

璃紗「む・・・」

星座は？

璃紗「さそり座」と

性別は？

璃紗「乙女」

瑠斗「何のためらいもなく言いましたね」

璃紗「なにか？」

瑠斗「いえ、ある意味すごいなーって思いました。」

璃紗「……………」

性格は？

璃紗「いつも暇で暇でしょうがない美しい才色兼備の乙女ってとこかしら」

瑠斗「否定が出来ない……………」

婚約者または恋人はいますか？

璃紗「彩梓也瑠斗あやしや りゅうとと」

瑠斗「それって恋人ですか婚約者ですか」

璃紗「どっちもよ」

瑠斗「……………」

外見は？

璃紗「さらさらロングヘアのダークパールのような黒髪に透き通るような白い肌ね。」

瑠斗「……………疲れた……………ってかよくここまで自意識過剰に……………」

璃紗「なにか？」

瑠斗「何もいえない……………」

お疲れ様でした。次はお連れの方にお聞きます。

瑠斗「マジで疲れた、」

あなたのお名前は？

彩梓也瑠斗
あやしや りゅうと

年齢は？

14歳

血液型は？

瑠斗「O型です」

璃紗「あら？O型なのに変なところでまめよね」

瑠斗「誰のせいですか……」

作者・O型の皆様すみません。ちなみに作者もO型です。

星座は？

璃紗「なんか、あきてきたわね。」

瑠斗「え……？」

【作者代理 おとめ座】

性格は？

璃紗「弟的な性格よね。でも、時々見せる男っぽいところがたま
んない」

瑠斗「……」

恋人や婚約者は？

瑠斗「無理やりですが天乃宮 璃紗あまのみや りさ」

璃紗「……」

外見は？

璃紗「小麦色の肌に大きな目少し小柄な女の子みたいな顔。」

瑠斗「ほめてるんですか、けなしてるんですか。」

璃紗「あら、ほめてるつもりよ?」

瑠斗「そうですか……」

二人ともお疲れ様でした。

景品として割り箸を差し上げます。

瑠斗「うわ!!きったね!。そう思わない?璃紗さん。」

璃紗「……許さない」

瑠斗「うわ!!殺気が!」

レストランの店員「割り箸は貴重な資源です!!もらえるだけであ
れしいと思いなさい。」

瑠斗「……この店も来るのやめよ……」

璃紗「そうね……」

レストランの店員「まいど有難うございましたあ」

璃紗& a m p・瑠斗「態度かわんの早!!」

桜咲き乱れる中僕の心も咲き乱れてます。ああ、泣きたい・・・

ああ、今日はえらく晴れているな。

周りには桜が乱れ咲いているし。

なんか人生桜色？（薔薇色と掛けてみた

あ、でも彼女が居ないんだよね

ま、興味ないけど。

そんなるんるん気分で足亜通り通っていた。（足亜通り・・・金持

ちの使う道。通称成金道）

今日は月曜日。

冬休みが終わって今日から登校。

今は登校中。

「！！！！ちょっと、貴方。溜斗じゃないの？」

げ・・・

ま、まさか・・・

幼稚舎の時に振り回してきた近所のねーちゃん・・・

しかもちょー金持ちのお嬢様。

そして俺が世界で一番嫌いな奴。

前言撤回。

今日は運勢最下位。

「・・・声に出てるんだけど。」

やばい・・・

つい、声に出してしまった。

・・・ここは、どうにか切り抜けるしかないな。

「こんにちわ。璃紗さん。僕、これから学校なんで・・・」
模範解答を述べた。

なんかのTVで見た「嫌いな人に会ってしまった時の逃げかた」
そして 逃げようとしたけど無駄だった。

「あら、ちよつとぐらいいいじゃない。今日はいっしょにいて貰いたいんだけど。」

う・・・早速来たよ。

僕を操るときにつかう璃紗さんの必殺技。

璃紗さんの甘えた声。

俺はコレに弱い・・・

「でも、今日さぼると、先生が・・・」

「あら、平気よ。私の伯父様が貴方の学園の理事長だもの」

璃紗さん。

貴女に常識は通用しないんですね。

あなたの魔の手から逃げるためにこの偏差値の無駄に高く無駄に金がかかる学園に入学したんですよ。

広告に「幼馴染の手から逃げるにはぴつたり！」

って書いてあったのに・・・

つか、はめやがった？

なのに・・・

理事長の名前、なんか違和感があったんですよ。

あなたの伯父様の学園でしたか。

あは・・・

これは偶然ですかね。

「貴方がその学園に入るって聞いたから心配で……伯父様に権力で理事長になってもらったの」

もう、なんなんですかね。

いやがらせでしょうか……

ああ、今日は絶対大雪だ。
世界滅亡だ。

そんな僕にも気づかず、

「さあ、カフェに入りましょ。」

なんていつてるし……

泣きたい……

璃紗さんの「カフェに行こうか」は侮れない。

今は、カフェの中

ああ、こんな日が来る気がしていた・・・

魔の手から逃げられる気がしてませんでした。

だって小さいころ

「溜ちゃんとは私と結婚するのよ。いい？」

って言われて、結婚の意味をあまり知らなかった僕は

「うん！！けっこんしょーね」

って言っちゃったんだよ。

覚えてない事を願います。

神様仏様アーメン！！！！

「ねえ、私達がした、昔の約束覚えてる？」

.....

¥（。□¥）ココハドコ？ （ノ□。）ノボクハダアレ？

「こら！！！！現実逃避するな！！作者も顔文字辞書から引用して文を省くな！！！」

ああ、ばれちゃった。

「あら？私、なんか最後変な事言ってなかった？」

僕も思いました。

作者って誰ですか？

まあ、どうでもいいです。

それより.....

「ねえ、今年、私何歳か知ってる?」

えーと僕より2歳上のはず・・・

「16・・・歳ですか?」

恐る恐る聞いてみた。

これで予想年齢と実際年齢に差が・・・しかも予想年齢の方が高かったりしたら・・・

こ・・・殺される

「ひえ!!」

「どうしたの?それよりそう、16歳よ。16歳と言えば!!!」
どうやら僕に答えなさいと言っ意味ですか?

「け・・・」

言いたくない。

「け・・・なによ?」

うつ・・・

「結婚のできる歳ですね。」

「そう!!その結婚!!昔した、約束。私と結婚すると言っ約束守ってね」

「・・・・・・・・」

「分かりました。では、貴方は後悔するでしょう。」
なんか、こわいな・・・

璃紗さんは兵器オタなのを忘れていた

「ゴメンナサイ。ボクハアナタトコンヤクシマス。ダカラコロサナイデ」

「宜しい。貴方が18歳になった時点で結婚します。いいですね？」

「ハイ。ヨロコンデ」

・・・

一体僕に何があつたって？

こんな状況に立たされたらきつと、誰でも言わざる得ないだろう。それは5分前・・・

「・・・・・・・・」

「分かりました。それは結婚したくない。という意味ですね？」

僕は首を縦にぶんぶん振った。

「貴方は後悔するでしょう。」

そう言つて僕に銃口を向けた。

「り、璃紗さん。それ、偽物ですよね・・・？」

「ええ。水鉄砲よ。」

は・・・？

み水鉄砲？

それで俺が怖がると？

「ップ」

思わず笑ってしまった。

「何がおかしいのよ。もういいわ。」

そうですか。

「ご自由に水鉄砲なんか怖くありませんよ」だ」

きつと、この言葉がいけなかったんだろう。

「もう許せない」

「バシユ。ジュワー」

前と後ろから音がした。

まず、前を見よう。

璃紗姉が、般若のような顔をして先ほどの立派な水鉄砲を持っている。

後ろを見よう。

・・・

「うぎゃー！！」

思わず奇声をあげてしまった。

壁がドロドロに溶けている。

「……………」

「この水鉄砲の中には鉄骨も溶かす、農硫酸とある液体を組み合わせた、物が入っているの。」

「……………んな、あほな。第一、その水鉄砲が溶けるんじゃない？」

「あら、平気よ。この水鉄砲。フランスで作らせたの。5000度にも耐え、あらゆる液体にも耐える性質を持っているの。それに、液体が飛びやすいように工夫もされているわ」

もうだめだ。

勝てない。

……

そして今になるわけです。

目の前では璃紗さんはペラペラ結婚とか婚約発表とか兵器の話をしている。

いつになったら終わるんでしょう…？

トホホ……………

だれだ男は根性！！っていったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたいです。

んー。

なんか、璃紗さんのイメージが崩れてきましたね。

どうしようw w

だれだ男は根性！！っていったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたいです。

僕は今、目の前のお嬢様に婚約の話を進められている。

困る。

全く人の話を聞かない人だ・・・

ってそんなこと言ってる場合じゃない！！

いくらお嬢様だからって酷いではないか？
だいたい、僕のこと好きでもなくないくせに。

他の婚約者と結婚したくないあまりに。

・・・

だいたい璃紗さんの事が好きかって聞かれたら、自信満々に答えられるさ。

「あの・・・璃紗さん。僕、貴女の事、好きじゃないんですが。」

そう、僕は璃紗さんのことが好きじゃない。
むしろ大嫌いだ。
なのに婚約だなんて。

「あら。昔、私の事を好きって言うてくれたじゃない。」

・・・・・・・・・・

いっておきます。

記憶ありません。

ごめんなさい。じつはそんな記憶が・・・

いえ、あるんです。

それは忘れもしないある夏休みの僕の昔の記憶――

ミーン

「ねえりゅちゃん。りさのこと好き？」

璃紗ねえが突然額に汗を浮かばせながらそんな事を言い出した。

せみとりをしていた。

恋愛というものを知らぬ僕は

「うん！！世界でいちばん好きだよ？」

とせみを片手に言った。

うあーーーーー

しかもそのとき流されて

「大きくなったらリサと結婚しようね」

っていつてきて僕は

「ウン！！僕と結婚してね」

っていつちゃったんだよ。

でも、12年も前のこと。

てっきり忘れていたのかと思っていたのに……

だれだ男は根性！！っていったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたいです。

んー

時間がないので、適当にちゃちゃとやっちゃいましたwww
感想やレビューは最高にうれしいです。

のでヨロシク！！

最近は寒いので風を引かないようにしてくださいね^^

震え。(前書き)

うん。

恐怖っすね

震え。

今僕はどこにいたって？

それは璃紗さんがトイレにいつてる間に逃げたのです。

そう、今は学校。

じゃなくて家。

学校だと手先（校長）がいるから。

僕の親はIT会社の社長とかまあ、歴代で社会を裏で牛耳っている。

あ、璃紗さんとの関係（家の関係）は

昔から天乃宮家とは縁が深い。

天乃宮家で女の子が生まれたら彩梓也家に嫁がせる。

彩梓也家に女の子が生まれたら天乃宮家に嫁がせる。

そういう風習がある。

もちろん他の家と恋愛結婚は出来るがその場合家と縁を切ることになる。

僕的にはいやだが・・・

今は少子化の時代。

なんとあの璃紗さんしかいないのだ。

だからどっちにしたって結婚しないといけない。

だから、逃げても無駄なのだ。

だが、言っておくが決して僕はMじゃない。（僕とか言っている時点で・・・by作者）

嫌い作者！。

・・・作者つてだれ・・・？

まあ、とにかく僕はSだ。（ありえないだろ・・・by作者）

煩い！！

とにかく、璃紗さんはチヨーーーーーだ。

うん。

ツンデレじゃない限り。

とにかく、ぼくは璃紗さんに振り回されたくない。

絶対に。

ぼくは断るぞ。

こんこん

「お坊ちやま、璃紗様がお会いになりたいとの事。会わなくば殺しますよ（ハート）」といっておられました。」

.....

さあ、断るんだ。

どうした腰！！

なぜ腰が動かない。

立てないではないか。

・・・

どうした手!!

震えているではないか。

どうした足。

震えていて立っていないではないか。

コレを世間一般では腰を抜かすというのか。

・・・

こんこん

「よくくもにげたわね」

・・・

怖い。

普通に怖いです。

璃紗さん・・・

震え。（後書き）

あ、何気に瑠の家がかねもってかいてあるw w
メイドが部屋に来るなんていいなア（肝）

あ、作者女だからねw w。

キモイ変体オヤジじゃないしw w

レズでもないからね（爆）

ではまた。

一段と寒くなつてまいりました。

みかんを食べて冬を乗り切ろう！！w

幻想。(前書き)

シリアスが混じっています。
初の璃紗さん視点です。

幻想。

世の中は腐っている。

社会を牛耳っている人物の娘あるからこそいえる言葉。

私は両親がどんどん金という欲望に惑わされて腐って人間じゃなくなっていくのを見た。

普通の人になりたい。

貧乏でも金持ちでもなく。

いや、貧乏でいい。

いい夫がいて、愛に満ち溢れていたら。

——でも、私は今日で16歳。——

婚約者を見つけないといわれた。

父によると

「婚約者候補はいる」

との事。

会って見ると、ロリコン、変体、オヤジ。

そんな奴ばかりだった。

全て断ったら溜斗だったらいいといってきた。

溜斗は嫌いでもないし好きでもない。

―― いわば、ただの幼馴染である。

しかし、あんな変体と結婚するぐらいだったら幼馴染の溜斗と結婚する方がいい。

そしていろいろやって叔父様に溜斗の通っている学校の理事長になっ
てもらった。

これから役立つだろう。

そして学校にいく気分にもなれないので外に出た。

そこらへんをぶらぶらした。

携帯がなっている。

きっと学校か父からであろう。

母がそんな心配をするはずがないから父だけ。

でも私は電話に出たら強制的に帰らせさせられそうなので無視した。

現実逃避に気もするけど。

もう飽き飽きだ。

毎日学校では作り笑い。

時に「ふふふ」とか「おほほ」とか反吐が出そうな笑い方をする。
自慢話、いじめ、差別――

そんなものであふれていた。

もちろん作り笑いをしながらかわりのないようにした。

自分まで腐ってきている。

そんな事思いながら歩いていた。

そしたら瑠斗が歩いているではないか。

そして声をかけたのだ。

他の婚約者達と結婚しないために

ご機嫌。(前書き)

皆様、御機嫌ようw w

最近寒いですね

布団に包まっていたいw

今回も璃紗さん視点です。

ちよつと妄想くさいですがヨロw

ご機嫌。

「ちよつと、貴方。溜斗じゃないの？」

私は溜斗にそっくりな人物を見つけたため、話かけた。
びつくり！な事にその人は振り返ってくれた。

溜斗じゃないの！！ラッキー

・・・なのに・・・

「う・・・ま、まさか・・・

幼稚園の時に僕を振り回してきた近所のねーちゃん・・・
しかもちょー金持ちのお嬢様。

そして僕が世界で一番嫌いな奴。

前言撤回。

今日は運勢最下位。」

なんていいだすのよ？

せつかく可愛い顔しているのに・・・

「・・・声に出てるし・・・」

あ！！思わず可愛げのないいい方しちゃった。

怒ってるかな・・・

そう思つて溜斗の顔を見ると真つ青な顔をしていた。

それほど会えてうれしいって事かしら

「こんにちわ。璃紗さん。僕、これから学校なんで・・・」

ム。模範解答を並べて逃げる気だな・・・？

それならこっちは色気だぜい

「あら、ちよつとぐらいいいじゃない。今日はいつしよにいて貰いたいんだけど」

あまゝゝゝい声をだしてみた。

どこからか「あまゝあい」って聞こえた気もするが・・・

「でも、今日さぼると、先生が・・・」

ム まだ言うか。

でも学校はどうしようもないか・・・？

あー！こないだ、叔父様に瑠斗の学校の理事長になって貰ったんだ
った。

それを告げるともう死人みたいな顔をしてた。

うーん。心配をかけてると思ってるのね

「貴方がその学園に入るって聞いたから心配で・・・伯父様に権
力で理事長になってもらったの」

だから大丈夫！っていつてあげようと思ったのに。

なんか泣きたそうな顔してるし。

これはカフェに連れて行くしかないな。

瑠斗への元気づけとプロポーズ（脅し）のために

「あゝもしもし。璃紗です。叔父様。瑠斗君借りますね。・・・ハイ。
有難う御座います。お体にお気をつけを。では・・・」

これでよしと。

さあ、瑠斗クンをメロメロにしちゃろ

フフフ・・・

ご機嫌 (後書き)

えっと面白かったらバンバン小説評価してください。してくれた方には、特にありませんw w
でも励みになったりランキングが上ったりするので (ランキング重視w) ヨロシクです

ではご機嫌よ (なんかマリア様が見てるっぽい・w w

く権力と圧力の対決の悪夢く椿視点く（前書き）

別の人視点です。

「権力と圧力の対決の悪夢」椿視点」

りゅうちゃん……私のこと好き……？

寝てるんだから答えが返ってくるはずないよね……

ねえ、起きて？

後2分であたしは引つ越さなきゃならないのに……

お父さんが、破産なんてしなければここにいられたのかな。

あたしがもつといい子にしておけばここにいられたのかな……

とにかくしなければいけない事は分かってるの。

もう一度。

もう一度りゅうちゃんに会うために……

「椿。もういくぞ……」

ああ、もういかなきゃ。

りゅうちゃん。

もう一度貴方に会うために立派な人になって戻ってきます。

それまで……まって……

「天乃宮 椿あまのみや ちはきです。よろしく願いします。」

私は今、りゅうくんと同じ中学、亜季原あきはら中学の3-B……りゅうくんと同じクラスにいる。

……そう私は転校して来たのだ。
なのにりゅうくんがいない……

「先生……彩梓也君はどうされたのですか？」

「・・・理事長の孫につれてかれたらしいぜ」

おいおい・・・学校の先生が正体を、しかもつれていかれたって・・・
大丈夫かよ・・・

「ま、彩梓也の隣にでも座っといてくれ」

チャンス・・・

情報では理事長の孫がりゅうくんを婚約者にしようとしているはず。
相手はりゅうくんを想っている人がいると気づいていても誰かまで
は無理だろう。

しかし、幼馴染の私は疑われているはず。

席が隣なら・・・

それに向こうが圧力で席を変えようとしても無駄・・・

明日・・・理事長は私の姉に変わるのだから・・・

私は生徒会長に・・・

経済的な問題なら、今は彼女を上回っているから・・・

フフフフ・・・

ゝ権力と圧力の対決の悪夢ゝ椿視点ゝ（後書き）

次回は椿と璃紗サンの関係が明らかに・・・。
投票はあり難いです。

皆様のおかげでアクセス数4,627人突破！！
有難う御座いますゝ

これから読んでくださいですw

瑠斗視点。追放者。（前書き）

今回もかなりシリアスです。

受験が迫っているのでコメディーが思いつかない!!!

まあ、作者の言い訳はほっといてくださいww

瑠斗視点。追放者。

「ふふふ．．．よくも私から逃げたわね？」

今、僕の目の前では璃紗さんが髪の毛を逆立てて．．．ものすごく怖い。

どーしよっかな。

逃げ場ないし．．．

「ああ、川の流れのように」

！？なに！！！！

コレは伝説の美空ひり！！

誰のケータイだよ．．．

なーんておもってたら

「はい。私わたくしですわ。ええ。．．．なぜ．．．なぜもつと早く言

わなかったのです！！！！！！！！！！急ぎなさい！！今すぐ。圧力でも法律無視でもいいから！！早く席を替えなさい！！」

璃紗さんが電話にでるなりものすごく怒鳴っている．．．なぜ？

つか最後の方ちよつとヤバ発言！！

「あの．．．どうしたんですか？」

おそーるおそーる答えるといつもものにつこり顔。

しかし、分かるのは顔が少し歪んでいて目が笑いきれてない。

作り笑い下手すぎ．．．

「ねえ。椿って子しってるかしら？」

椿．．．？

聞いた事があるような気もするけど．．．

「いえ？知りません。」

この答えが無難だろう。

何を安心したのか璃紗さんはほっとしたような顔をしている。いつたい．．．？

「私^{わたくし}と椿は従兄弟なの。明日・・・椿とあえるわ・・・。」
そっつい終わった後、璃紗さんは複雑な顔をした。

「椿・・・天乃宮を名乗るなんて・・・許せない。追放の身のくせして・・・。」

瑠斗は璃紗がそんな事をつぶやいているのを聞いていないふり本当に聞こえていないのか・・・
璃紗とは別の方向を見ていた。

瑠斗視点。追放者。（後書き）

どうもです!!

最近、読者数や感想が増えてきてうれしい一方です。

次回は読者サービス。

璃紗さんと瑠斗の過去についてお話しようと思います。

お話のリクとかがあったら感想の方でいつてくださいな。

参考にさして頂きます。

お宝探し。ゝってか純粹乙女かよっ！ゝ（前書き）

今回は下ネタ炸裂なので気をつけてくださいね w
w
りゅーくん&璃紗さん視点です。

お宝探し。ゝってか純粹乙女がよっ！ゝ

椿さんの話以来、璃紗さんはいつも通りの変人さんに戻った
今日は璃紗さんが僕の家に来ていて、今は僕の部屋でゲームを一緒にしている。

「ねえ、なんだかのどが乾いたー。」

ゲーム終了。

僕が負けました・・・

「聞いてるわけ！？喉乾いたんだけど。」

はあ、そんなのずっと横にいるメイドに言えばいいのに・・・

「メイドどこよ！？もう。りゅうちゃんが入れてきて。」

はあ？ったく・・・メイドがいらないなんておかしくね？

「・・・さつさといかんかい」

そういつてジャンバーの裏ポケットから拳銃をだす璃紗さん。

・・・

つて、おい！！！！ここ日本だっつーの！！！！

いやいや、偽物ですよね？

でもこないだ学習してもし偽物でも、本物よりも威力が倍と分かった。

「・・・分かりました。」

そういつて僕は下の階にコーヒーを入れにいった。

璃紗さんはこう見えてコーヒーが好きなのだ。

うーん。

僕は璃紗さんにこき使われている気がする・・・

今日は日曜日。

明日ガッコーか・・・

おっかしいわねえ。

りゅうちゃんも男だからエロゲーとかエロビデオとかエロ本とか在りそうなのに・・・

ベツトの下も机の中も金庫の中も見つからない・・・

あ、金庫には100万と通帳が入っていた。

何！？さすがに通帳までは見なかったわよ！

「ねえ。メイドさん。健全な男が持っているようなものりゅうちゃんには持っていないの？」

メイドさんはいつからか帰ってきていた。

「メイドさんじゃないです、高橋です。瑠斗様はそんなものを持っておられません。」

ちなみにピーだそうです。さすが彼女無い歴14年。
・・・

いや、最後のピーは聞いてないから・・・

恐るべき高橋さん。

よくこんな人を雇ったな！。

余計な事いいそうなのに。ってか、もう言っただけ。

ってか彼女いない歴14年って！！

ってことはファーストキスもまだ！？

純粹乙女か！！！！

「何してるんですか璃紗サン！！！！？？？」

見事に瑠が帰ってきたら部屋はごっちゃゴチャでした。

「ねえ。りゅう君ってほんとに男？」

なーんて失礼極まりない質問を璃紗さんはしてきましたとさ

お宝探し。ゝってか純粹乙女かよっ！ゝ（後書き）

皆様ぴーの部分は分かりましたか？w w w

でもって次回はりゅーちゃんが学校に行きます！！！！

椿さん大暴れの予感w w

璃紗雷のち椿霰。

注：小説「お嬢様と夜空」の作者と「お嬢様の憂鬱」の作者は違います。

私こと「お嬢様の憂鬱」の作者は瑠璃です。

ヨロシクです。

最後にゝ

レビュープリーズ！！！！（笑）

学校へ行こう！！へ？シリアスな話の題名がそれでいいのかって？そんなの関係

かな〜りシリアスです（笑）

学校へ行こう!!へ?シリ阿斯な話の題名がそれでいいのかって?そんなの関係

予想外

そしてその子の周りには男子や女子が囲っていた。

こっちに気づいたようだ……。って、ええええええええええ！！！！！！
ま、ま まって！！今、僕のことをりゅーちゃんって言ったよね。
痛い！！みんなの視線が痛い。

「ああの・・椿さん・・僕のことを知っていらっしやるのですか？」

今の僕にはこんな事しかいえなかった。

「ねえ・それ、本気で言ってる？ 椿のこと覚えてないの？ 精神科
通い？」

なんか聞いた事のある台詞だな・・・

「すみません。何処かでお会いしましたか？名詞を貰った覚えはないんですが・・・」

僕は思ったことを素直に言った。

パーティかなんかで会ったつけ。

「嘘！！・・・嘘って言うてよ。たった、たった10年前の話なのに・・・あたし覚えてるのに・・・」

彼女の顔がどんどん青くなっていく。

僕は啞然として黙っている事しかできなかった。

「何！？あたしのがんばりはなんだったの？？貴方のために何もかも捨てたのに・・・周りの人があたしを見捨てても、がんばったのに。」

もう彼女は泣いていた。

僕は理解が全く出来なかった。

「本当に覚えてないの？ありえない……」
僕は……

「ごめん。」

本当に覚えていない……

バシッ！

「サイテー。もういい。神も何もかも、りゅうちゃんまで、私を見捨てたんだわ。」

そんな呟きが聞こえた。

彼女は泣きながら僕を殴った。

痛くない。

けど、胸が痛い。

僕も涙が出てきた。

もらい泣きかな……

皆シーンとしてこっちを見ている。

そんな事を思っていたら、璃紗さんが入ってきた。

な、なんで？

「椿！！貴女は・・・自分のした事を分かっているのかしら！！」

璃紗さんの顔が見えた。

こんな璃紗サンの顔は見たことがないな・・・

真っ赤で、目が釣りあがっていて――――ボウガンを持ってい
る――――

って！！ボウガン？

「ちょ、ちょっとボウガンは・・・」

「黙ってなさい！！！！この子は死なないと自分の罪の重さが分からないのよ。」

椿さんの顔をチラッと見た。

以外にももう泣き止んでいて今は赤く顔が染まっていて下唇をかねで掌をこぶしにして今にも怒りを爆発させそうだ。

「彼女のせいで彼女の父は破産したのよ。」

璃紗さんのその一言でまた、椿さんは青くなった

学校へ行こう！！へ？シリアスな話の題名がそれでいいのかって？そんなの関係

人気投票を受け付ける事にしました

小説評価／感想のページで受け付けています。

投票ヨロシクです！！！！

次話もシリアスですがヨロシクです。

変な伏線をはってすみません汗

学校へ行こう!! 2 (前書き)

シリウス上等!! (不

学校へ行こう！！2

今、僕の目の前にはボウガンを持った璃紗さんと青くなって今にも倒れそうな椿さんがいる。

「彼女のせいで彼女の父は破産したのよ。」

璃紗さんがボウガンを持ちながら叫んだ。

「彼女があの日あんなことを言わなければ……」

――彼女は小さいころから我が儘で自分勝手に怒るのが早かった。

もちろん、皆からはそのせいで嫌われていた。
そこに溜斗が現れた。

「一緒にあそぼ」

この言葉をきっかけに二人は友達になった。
そしていつしか椿は溜斗を好きになった。

――しかし、溜斗は親によって璃紗と結婚する事を決められていた。
「仮婚約だが。」

彼女は諦めなかった。

父に頼み乗り気でない父を無理やり璃紗の父と対等させた。

そして、経済力の強い璃紗の父に負け、椿の父は天乃宮を名乗る事を禁止され、追い出され、

破産した。

そして自殺を図ったのだ

「・・・というわけよ。」

なるほど・・・

「うるさい、うるさい！！あなたに何が分かるって言うのよ！！！！！！
！！何もしないでりゅうちゃんと結婚できる身の癖して。」

椿さんは、教室を飛び出して入った。

それほど大変な事態だったのか？

天乃宮の名を名乗るのが禁止されるのがそんな簡単な理由――？

「もしかしたら、椿は屋上――」

え？

「彼女は一種のうつ病でね・・・学校へ来れるはずないんだけど・・・なんせ5年間学校には登校拒否で来てないんだから。」

じゃあ・・・

「やばいわね・・・あの子は父をこよなく愛していたから・・・」
「.....」

「まさか.....」

「急ぎまじゅう.....」

僕たちは屋上へ向かった

学校へ行こう!! 2 (後書き)

次回で、シリアスはいったん終わります。

レビュープリーズ。。。。

寒いです・・・

椿さん絶体絶命！……今日の占い最下位でした！スペシャル（前書き）

今回でひとまずシリアスは終わります！！
お付き合い有難うございました！！

椿さん絶体絶命！？今日の占い最下位でした！スペシャル

「椿さん！！早まっちゃダメです！！！」

僕はそう叫びながら勢いよくドアを開けた。

僕は啞然とした。

「……私、自殺なんか考えていませんわ。ただ……頭を冷やそうと思って……」

椿さんはふうと息をゆつくりはき、フェンスにもたれた。
ギシッという音がした。

「私は、過去を忘れるために、仕事をずっとやってきた。倒れるほどに……」

またギシッという音がした。

「ねえ、……貴女の初恋の人はこの人じゃない……？」

そう璃紗さんは写真を見せた。

僕じゃないのか……？

「……貴女が勝手に勘違いをしてこの子の名前を彩氏也 瑠斗だ
と思い込んだ。」

僕はパズルが解けた気がした。

なぜ、僕が椿さんの記憶を一つも覚えていないのか。

僕は元から椿さんを知らなかったのだから覚えているはずもない。

「そんな……」

椿さんは青ざめた……

ギシ・・・ギシギシ!!!!!!!!!!!!

ものすごい音が聞こえた。

見ると椿さんの姿とフェンスが見当たらない。

しまった!!!!この校舎は古い・・・

そんな事を考える暇もないはずなのに考えてしまった。

「た助けて!!」

そんな声がして我にかえった。

その声のほうに行くとフェンスは下に落ちていて最上階の窓枠に足をかけていた。

いまにもバランスを崩しおちそうな状態・・・

僕は椿さんに手を差し伸べた。

「早くつかまってください!!!!!!」

そうせかすとおどした椿さんが手をゆっくりと伸ばした。

その瞬間・・・

椿さんがバランスを崩し、窓枠から足が外れた。

僕はどうやったのか分からないけど、椿さんの手を瞬時につかんだ。

後は大丈夫。僕は意外と腕力があるのだ。ひょいと椿さんは持ち上がり地面に着地した。

「あ有難う御座います。」

今は椿さんの顔が涙で歪んでいた。

後ろを見ると璃紗さんが力抜けたように地面に座っていた。

「溜斗って・・・以外と腕力あるのね・・・」

璃紗さんがまだ信じられないというかのような顔をしていた。

「よく言われます。」

「今回は手伝えなくてごめんなさい。」
璃紗さんが申し分けなさそうに言った。

「いいえ。それが普通の反応でしょう?」

と僕が言うと

「じゃあ貴方は普通じゃないわね」

と言った。

「あ・・・ゴメンなさい」

ふと、自分の言った事に気づいたのか口を押さえた。

そうして今日は家に帰った。

END

で終わるはずもなく!!!!!!

その後僕たちは先生方にた~~~~っぷり怒られた。

まず、璃紗さんは 不法侵入&不法物を学校に持ってきたことについて怒られた。

僕は授業サボり&フェンスの破壊。

椿さんも僕と同じくサボり&フェンスの破壊。

なぜか僕は先生に「女の子達に変な事をさせるな!!」と意味不明なお叱りも貰った。

トホホ・・・今日は最悪ですな・・・

椿さん絶体絶命！???今日の占い最下位でした！スペシャル（後書き）

次回は椿さんが恋をする！？編です。

皆さんの予想を裏切りながら書いていきます（笑）

やっぱりレビュー（感想&評価）プリッス!!

では アディオッス。

椿さん愛の告白？ 瑠斗初めての

をしちゃう！？ 璃紗さん正気？ た、助けて

「あの・・・」

椿さんが目を輝かせている。

「私、貴方を好きになっちゃいました！！！！」

・・・

よく考えよう。

好き・・・LOVE・・・te quiero・・・Je t'aime・・・Ti amo・・・Ich liebe dich・・・

「あの～現実逃避なされてません？ しかも最後らへんは愛してるになってるし・・・」

あゝ。僕って現実逃避激しいからな～

「って・・・ぼ、僕のことを好きですと！？」

「はい！！！！こないだ、助けてくださったときに一目ぼれしちゃって・・・」

マジですか！？

「あの～、でも昔好きになった方は？」

「ふふっ。昔好きだった。ですわ。」

な、なに～！？それはつまり本気に？

「……私も天乃宮。どちらも愛がない結婚より、どちらかでも愛がある結婚がいいのでは？」

う・・・なんか、僕、弱みが握られている？

「まちなさい！！私の婚約者をたぶらかしてもらっちゃあ困るわね。」

うんですが・・・ 璃紗さん。時代劇な話し方ですね。もしかして・・・とは思

「うちのリュウチャンを奪うなんてひやくねんはやいのわよ……」

最後、かみましね。

「ころなしか、璃紗さんの顔が赤い。」

「それは、

「璃紗さん！！ま、まさか冷蔵庫に入っていたボトル飲みました！？」

父が買ってきたボトル……つまり酒！

「のんでにやいわよ」

あてにならねえ。めっちゃあてにならねえ。

「ねえ、
溜？」

なんでですか？僕は寒気と戦いながらも聞いた。否、その言葉は飲み込んだ。

なぜっ
て？

ふと、僕の唇にほんのり暖かいものが降って来たから。

[illegible]

ちよ、ちよつとまって！！この成り行きでどうしてキスを！？

「キスしたくなつたから。」

んなあほな——！！！！！！

「……………」

ちよ、椿さん、その無言怖いつて!!

「私のりゅう君に……………」

「あゝらリュウちゃんと婚約をしているのは私よ。」

「りゅう君のこと好きじゃないくせに。」

「嫌いでもないわ。」

ちよ、火花散ってる!!

てか、た 助けてくださいいゝ ぐすん。

椿さん愛の告白？ 瑠斗初めての　をしちゃう！？ 璃紗さん正気？ た、助けて

注：20歳未満の飲酒は認められていません。

璃紗さんの酔っ払い〜!!だ、誰か助けてよ〜(前書き)

下ネタ炸裂代2団!!

あ、あくまで下ネタの域ですからw

璃紗さんの酔っ払い！！だ、誰か助けてよ

「ちよーつとまって！！」

僕は大声で叫んだ。

「なんですか？」

「なによ？」

二人とも、ハモツテルシ・・・

「り、璃紗さん！！僕のファーストキスを奪うなんて・・・酷いです！！」

・・・璃紗さんと椿さんは『恐竜を見ました！』見たいな顔をしていた。

「まさか・・・とは思ってたんだけどね。」

璃紗さんが苦笑しながら言った。酔いはさめたのか？

「・・・・」

・・・・椿さんおどろくと無言になる癖やめてください。怖いで

「やっぱり、りゅうちゃんは純粹乙女ねー」

ケラケラ笑う璃紗さん。

「ってか、知ってましたね？」

「だって高橋さんに聞いたもの。」

高橋さんって？

「まあ、誰でもいいじゃない。ケラケラ」

いや、個人情報の流出の恐れがあるんですが。

「ってことは私はりゅうちゃんの『初めて』を奪っちゃったわけか。」

璃紗さんがケラケラいいながらいった。酔いさめてないな。

「ってか、その言い方なんかいかかわしく聞こえますからやめてください。」

まじでやばいって。どーってーって言うてる時点で18禁にならないか心配してんのに。

【あ、そこは大丈夫。ひらがなでやったから平気さケラケラ by 作者】

作者って誰だよ！ってか、大丈夫じゃないから！！！！

「婚約者の私がりゅーちゃんにkissしてもなーんにもおかしくないわよねー？」

こ、怖いですから

つか、そんなに顔近づけないで下さい。

さっきのでちょっとトラウマになってるんですから。

“ドス”

・・・この状況やばくないですか？

ちなみにここは僕の部屋。

何で璃紗さんと椿さんがいるんだーっていうつつこみはおいといて、

・・・

今、僕、・・・

押し倒されてるんですが。

さ・れ・て・る　だからね？

普通逆だよな？

てか、18禁なりかけてない？

や、やばいですね。りゅ、瑠斗が……!!!!!(前書き)

ん

15禁かな? ? W W W

これってぎりぎり?

大丈夫だと思うけど W W

や、やばいですわ。りゅ、瑠斗が……!!!!!!

……

ど、どうしたらいいんだよ俺

あ、パニくって俺になってる。

えーと、こういう時ってどうしたらいいの？

まず僕は璃紗サンに押し倒されていて、

顔が残る所5センチってトコまで来てるんですが。

4センチ……

3センチ……

2センチ……

後1センチ……

0……

ここでキスかと思ったならなんと璃紗さんは僕の肩に顔をのせた。

「スーッスーッ」

・・・・・・・・

寝てる。

酔いつぶれたなこの人。

「ふう・・・このままアダルトな事が起こるのかと思いましたわ。」

って椿さん！！いたなら助けてよ！！

「え・・・ほら、なんか先が気になって。」

頬を紅色に染めながらぼつといわないで下さい！！！！
先が気になったって！！

「うゝ溜ちゃん水ゝ」

はいはい・・・

「ゴメンだけど椿さん、水持ってきてくれる？あ、僕も欲しい。」
璃紗さんをほつとくわけにもいかないのです。

「ハイゝ」

じゃあ水は椿さんにまかせて・・・
いまさらじゃ遅いかな。

冷蔵庫に入っていたウコン。
ウコンを璃紗さんに渡した。

「うゝ頭痛い。」

とかいいながら飲み干した。

「そりやそうですよ。ボトル一本飲み干したんですから。」
そんな他愛もない話をしていると椿さんが帰ってきた。

「ハイ、水もつて来ました。」

そういつて椿さんは僕と璃紗サンに水を渡した。
普通、璃紗さんに先に渡さないかな？？

というか、璃紗さんあんなことして僕を誘ってるわけ？？

まったく僕のこと好きじゃないくせに。
勘違いさせるような行動はやめて欲しいよね。

これは璃紗に説教しねえとな。

「おい、璃紗。」

俺がそういうと璃紗はめっちゃ驚いていた。
正直そういう顔そそる。

「ねえ、椿、瑠斗に酒渡した？」

璃紗が怖い顔で聞いてくる。

やばい・・・りゅうくんがお酒を飲んだらどうなるんだろって思
ってりゅうくんには水じゃなくてお酒渡しちゃった、

私が返答に困っていると

「俺が出てきてるってことは瑠斗の奴が酒飲んだしありえねえじ
ゃん。」

瑠くんがかっこいい顔でいつてきた。

いつものりゅうくんは可愛い、って印象だけど今はカッコイイって
顔。

「・・・俺、瑠斗じゃねえよ?」

っ
ていうか、話が飲めない。
りゅうくんどうしちゃったの？？

や、やばいですわ。りゅ、瑠斗が……!!!!!(後書き)

ん

次はもうちょっとやばいかな。

あ、次話はお正月&mp・年越しバージョンと普通なのがありますww

番外編：璃紗視点。年越しとお正月を

ふう……

今日の仕事はこれくらいかな。

今日は31日。

だから仕事はいつもの3分の1、しかも書類のまとめとか細かい仕事だけ。

天乃宮財閥の仕事を今は手伝ってるけど、りゅうちゃんが婚約認めたら彩氏也グループの仕事

を手伝う事になる。まあ、秘書になるってことだけど。

普通、天乃宮の仕事は長男がやるのに。

お兄様達は別の企業を立ち上げて、別の一家を作るそう。

だから、お母様の旧姓を名乗ってる。

お母様の家は、彩氏也で裏社会を操り、表社会も牛耳ってるらしい。でも、名前は誰も知らない。

いから、彩氏也っていつでも誰も知らないの。

まあ、それで私には彩氏也を名乗ってるお兄様が3人いる。

お正月は、お兄様が唯一帰ってくる日。

まあ、天乃宮と縁切りしたわけじゃないからお正月といえど、天乃宮の仕事をたっぷりやって

貰う。

もちろん私も仕事しますよ？

挨拶に周るだけだけど。

でも、その挨拶をする件が半端じゃない。125件。

一日で周るのだから疲れる。

しかも、夜7時から家でお正月の行事をいろいろするから、7時までで。

でも、うれしい事に日本のお正月は1日じゃない。

3日目にその仕事はする事になる。

1日目、つまり明日は椿、瑠斗とお正月を過ごす。

本当は椿は要らないんだけど。

この言い方、なんだか私が瑠斗のことを好きみたい。

嫌いではないけどな。

瑠斗とは一緒にいたい。

そう思うけど、私は恋なんかしたことないし、恋とかただの友愛かもわかんないし。

もうこのままでいいやって感じ。

なんか、考えてて時間がたったな。さてと、もう家にかえろっと。

「璃紗様、瑠斗様からお電話です、」

ん？瑠斗から？何の用かな。

「もしもし？？」

こっちは眠いのよお。

「あ、璃紗さん？仕事終わったみたいですね。僕も今終わったんですが、一緒に年越ししませ

んか？」

へ！？めずらしー！瑠斗、いつもあたしを避けてたのに、リュウトからのお誘いは本当に珍し

い。

「珍しいわね。いいわよ。じゃあ、あなたの家に行くわ。」

そして電話を切ろうと思ったけど、声が聞こえた。

「璃紗さんとなんたか年越ししたかったんです。」

って聞こえた。

なんだか、体がほてる。

きつと、いつも瑠斗から聞けない言葉を聞いたからだな。

もう、瑠斗め。変なこといわないでよ。

でも……年越し、楽しみだなあ。

番外編：璃紗視点。年越しとお正月を（後書き）

明けまして、おめでとunggざいます!!!
初小説!!

おめでたいです!!!

あ、おめでたいのはお前の頭って思った方!!
いいことですじゃん。（日本語変。

まあ、とにかく、よいお年を!!

A , H a p p y N E W y e a r ! !

豹変した瑠斗。(前書き)

なんかシリアス??

豹変した瑠斗。

え・・・？

瑠くんじゃないってどういこと？

「だからさあ、俺は陸斗^{りくと}。」

はああああ？

瑠くんが瑠くんじゃない？？

どういことさあ？

「あのねえ・・・ZZZZZ」

って、寝ちゃったじゃないっすか！！！！

「ハア、だから瑠斗にお酒飲ませないでっていったのに。

瑠斗はねえ・・・お酒を飲むと豹変するのよ。

普段、Mの瑠斗がド・Sの陸斗になるのよお。

だから、嫌だったのに。」

いや、理由になってませんから。

てか、よけい分けわかんなくなりましたって。

「んー、瑠斗の中の理想の男、って言う奴があれよ。

馬鹿ねえ。今の瑠ちゃんていいのに。

皆からMだって弄られるの気にしてたのね。

「……………まあ、瑠斗は本当はMじゃないけど。」

「え、最後何か言いましたか？」

「いいえー何も。」

むー？何か、隠してるなー？？

でも、瑠クンにそんなことあったんだー

璃紗さんしか知らなかった瑠クン。

私の知らない瑠くん。

私は何も知らなかった。

だれが、瑠ちゃんの事を教えるものですか。

私しか知らない、瑠ちゃん。

瑠ちゃんは渡したくない。

・・・このモヤモヤなにさ。

瑠ちゃんは私のものだから。

誰にも渡さないから。

このままで、いいの。

私しか、瑠斗のことを知らなくていいの。

私にだけ。

私にだけ、素顔を見せて欲しいの。

最終話 好きという気持ち。

じゃまだ。

こんな気持ち。

好きという気持ちは持つてはいけない。

親からそう教わってきたから。

・・・

溜斗は知らないな。

私が、・・・否、昔のあたしが・・・

どんなに最低だったか。

溜斗はあたしがただの気さくな姉と思ってるけど。

あたしは・・・

・・・無意味に・・・

付き合っでは別れ付き合っでは別れ・・・

好きでもないのに、付き合ってといわれたら付き合っ、そんな人

だから婚約の話が来るまで、男が絶えた事がなかった。

たぶん、40人ぐらい。

もしかしたらそれ以上かも。

断った事がないから

10人以上を股にかけたことがある。

同じ学年の付き合いってる奴を省いた男の半分はあたしと付き合い合ったことがある。

今のあたしはそんな昔の自分が嫌い。

大嫌い。

いつからだろう。

そのことを、昔と思えるようになったのは。

初恋は実らないって何かで聞いた事ある。

でも、あたしの場合、初恋は実らせてはいけないもの。

自分を抑えるために。

本当は寂しかった。

だからって男と遊んでた自分が

大嫌い。

だから、好きって気持ちを持ったら、りゅうに申し訳なくなってるだろう。

そしたら、あたしは溜斗から離れていくに違いない。

婚約破棄……

そんな言葉が脳裏を過ぎった。

ダメ。絶対ダメ。

あたしの婚約者は彩氏也溜斗だけ。

どんな手を使っても。

過去を隠して。

結婚するためならこの苦しいはちきれそうな気持ちを隠して。

じゃあ、この苦しいはちきれそうな思いは何？

知ってる。

気づいてた。

でも隠してた。

知りたくない。

でも知りたい。

ハハ・・・どっちなんだろう・・・

臆病なあたし。

「あ、璃紗さん！！だめですよ！！僕の家で寝ないで下さいよ。」

誰かの優しい声が聞こえた気がした。

その声はあたしを包みこんでくれるようで、あたしに安心をくれた。

あたしはふと、

他のオヤジらと結婚したくない理由だけじゃなくて、

「なみだ璃紗さん？どうしたんですか？って本当に寝てるのか。
涙？」
・
・
・

他の

イケナイ理由をおもい

お嬢様の憂鬱上巻
E N D

感じた。

後書き by 瑠璃。 〓上巻終了の後書き〓

つ、ついにお嬢様の憂鬱上が終わりを迎えました!!

私も、びっくりです。

でも、区切るならここがいいかなって思って。

勝手ながら残りは中巻に残したいと思います。

お嬢様の憂鬱上のテーマは、‘お嬢様’という身分のせいで(?)
始まる恋です。

お嬢様の憂鬱中のテーマは、過去に囚われた苦しい恋です。

ギャグはなくなり、シリアスと切ない純愛がほとんどになると思います。

でも!!!!!!

瑠璃がシリアスに飽きたら番外編としてギャグコメを書こうと思っ
てます。

基本的にギャグが好きなんで(笑)

私が気に入ってる話は「お宝探し。〓ってか純粹乙女かよっ!〓」

です（爆）

あの話は少し下ネタ気味ですが、その分笑えると思いますw
本当に、上巻とはいえ、終わるなんて信じられないなあ
そういえば

実はこの話、ただの自己満足のために書いた話だったんです！！
もともと、小説を書くのが好きで。

そんな時、友人kさん（紀光）から一緒に書かないかって誘われたんです。

そんなこんなで出来た小説がたくさんの読者様と、温かい声援のおかげ様で、

32,491アクセス突破！！

とても、とても嬉しいです。

そしてなにより、感謝しています。

3万アクセス突破って聞いたとき信じられませんでしたww
いつの間にか、読者様は日に日に多くなっていて・・・

とても、嬉しいより先にびっくりしました（笑）

お嬢様の憂鬱中巻でも、温かい声援とご愛読をよろしくお願いします！！

それでは、また、お嬢様の憂鬱中巻でお待ちしています！！

2008年、1月13日

瑠璃るり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0657d/>

お嬢様の憂鬱 上

2010年10月15日09時08分発行